

受領No. 1695

水産養殖におけるバイオテクノロジー導入を通じた共生食料システムと「代謝の攪乱」：人類学的視点からの分析

代表研究者 吉田真理子（広島大学大学院人間社会科学研究科 助教）

Metabolic Rifts in Bioengineered Life: Environmental Anthropological Perspectives from Oyster Aquaculture

Representative Mariko Yoshida (Assistant Professor, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University)



研究概要

産業資本主義経済と高度科学技術によって構築された現代のグローバルネットワークは、商品流通の多様化と食料供給の安定化をもたらしてきた。一方で、こうしたネットワークの拡大は、プランテーション開発による生物多様性の減少や、ウイルスを媒介する生物の生息域拡大を通じて、人獣共通感染症のリスクを高めてもいる。このように、人間の生産活動が地質学的スケールで生態系を不可逆的に改変する人新世において、社会経済的な不均衡は食料システムにも顕在化しており、「いかに自然をコントロールするか」が喫緊の課題として浮上している。とりわけ、海洋酸性化に脆弱な貝類に対しては、染色体操作による三倍体牡蠣の商業化が進められているが、斃死リスクの増大を指摘する研究もある。本研究は、気候変動によって海洋の物質循環にもたらされる不確実性を、牡蠣の商品流通網をめぐる生産者、海洋生理学者、ゲノム編集ベンチャーの関係性から人類学的に分析する。日米における牡蠣種苗開発およびゲノム編集ベンチャーを対象に、三倍体牡蠣の商品化と環境適応をめぐる知識実践を考察する。国内外の環境人類学、政治生態学、マルチスピーシーズ民族誌、科学技術社会論に新たな視座を提示する。